「戦争と平和」ゼミにみるゼミ生の学び

宇　多　智　之※

Findings from Seminar Activity “War and Peace”

Tomoyuki Uda

キーワード：トルストイ、戦争と平和、神の愛、自然描写、歴史哲学、ピアラーニング、論評、フィードバック、ゼミの実態、学生の取組み
Leo Tolstoy, War and Peace, God’s love, nature description, peer learning, commentary, feedback, reality of the seminar, student initiatives

Summary:

This paper provides the changes and findings among students of ‘Shibasaki Seminar’ in the faculty of Global Media Studies. After reading “War and Peace”, historical novel by Leo Tolstoy published in 1869, the students discussed freely according to their interests.

“War and Peace”, panoramic study of early 19th century Russian society, is generally regarded as a masterwork of Russian literature and one of the world’s greatest novels. It is said that recent students do not read books very much and few students read world literature as such.

Students of ‘Shibasaki Seminar’ do read “War and Peace”. The way they read, what conclusions they have reached through group work, and what have been discussed within the seminar, is academically exciting and amazing.

One team analyzed the character from “War and Peace” to see what kind of love have been described among each character. They made the hypothesis that Tolstoy wanted to convey the theme of “God's love” in this work, and developed the idea that Andrei and Pierre had arrived at the stage of “God's love”.

Another team felt there is “something” indescribable only through the words of the characters, and assumed nature description is playing that role in “War and Peace”. They noticed that the main characters look up at the sky at their turning points in their lives, and focused on the expression of the sky. Finally, they concluded that war and peace are all about human activities, and by drawing on the magnificent nature, the human actions can be raised as small things. Tolstoy's view of nature has been reflected in the scene.

Although they can achieve such wonderful results, many students are unaware of their potential, and they tend to underestimate themselves. On the other hand, it is not possible to bring out the potential of students just by providing literature and simply giving out assignments.

※　独立行政法人　国際協力機構

So what kind of mechanism can show such growth? Is it excitement to approach the essence of the literature through group discussions? Is it competitiveness to have better discussions than other teams?

The strengths and important characteristics of the ‘Shibasaki Seminar’, “learning in a mutually beneficial relationship between the students,” are very useful because peer learning can be carried out consciously among them.

It is always amazing how students work, discuss, consider and discover. As an author, I would be very happy if this paper would lead to an understanding of students’ motivations and potentials.

第1章　はじめに

1－1　本稿の目的

（1）筆者の自己紹介、芝崎ゼミとの関わり

筆者は独立行政法人国際協力機構（以下、JICA）に20年以上勤務している、開発援助や国際協力の専門家である。JICAでは、途上国の人材育成を目的とする技術協力事業に長く従事してきた。

筆者と駒澤大学GMS学部芝崎ゼミとのかかわりは長く、ゼミ立ち上げ時の2007年から10年以上様々な形で関係している。最初はゲストゼミの講師として年に数回授業を担当していただけであったが、次第に関わりの度合いが深まり2016年度には2泊3日の夏合宿と春合宿に全日程参加し、ゼミ生と共に学びを楽しんだ。芝崎厚士氏が不在であった2017年度及び2018年度前期は、非常勤講師として4年生のゼミ生指導を担当した。

現在も継続している筆者担当のゲストゼミは以下の3つである。

▶「アサンテ・サーナ」ゼミ

タンザニアに派遣された青年海外協力隊員の活動を描いた映画『アサンテ・サーナ』（谷口千吉監督、1975年）の映像分析を通じて、そこでの援助のあり方、国際協力のあり方から何を学べるか、そしてそれが現在および今後の援助のあり方や、国際関係を学ぶ上での自分たちの姿勢としてどういう教訓を与えてくれるかを発表するゼミである。2011年度に開始し、本稿執筆時点で9回目を迎える（詳細については本論集第19号の拙稿「「アサンテ・サーナ」ゼミにみるゼミ生の学び」を参照されたい）。

▶「PDM (Project Design Matrix)」ゼミ

論理的思考を身につけることを目的に、実社会の課題を解決するプロジェクトを立案するゼミである。ゼミ生はプロジェクト形成のプロセスで「必要十分条件」、「原因-結果」、「手段-目的」といった概念を具体的な事例として学ぶとともに、立案したプロジェクトの発表を通じて他のゼミ生と論理的正当性を検証し合うことができる。芝崎ゼミの中でももっとも長期にわたるゲストゼミであり、2007年度から継続している（詳細については本論集第20号の拙稿「「PDM (Project Design Matrix)」ゼミにみるゼミ生の学び」を参照されたい）。

▶「ジャン・クリストフ」ゼミ

2012年度に加わった企画「ジャン・クリストフ」ゼミは3年生後期に行うもので、夏合宿終了後から2 ～ 3か月かけてロマン・ロランの3000ページ近い長編小説『ジャン・クリストフ』（新庄嘉章訳、全4巻、新潮文庫、1969年）を読破し、登場人物の名前を冠したグループに分かれて、作品を分析し発表するという活動である。残念ながらこの本が廃版となり古本も年々入手困難となってきたこともあり、2015年度からは作品をトルストイの『戦争と平和』（工藤精一郎訳、全4巻、新潮文庫、1972年）に切り替えて「戦争と平和」ゼミとして開催し、今日に至る。

(2) 本稿の目的は何か

本稿の目的は、ゼミ生たちがどのように『戦争と平和』を読み、グループワークを通じてどのような結論にたどり着き、どのような議論がゼミ内でなされているのか、実情を広く知らしめることにある。合わせてゼミ生の潜在能力（ポテンシャル）がどのように引き出され、発揮されるのか、その要因についても考察している。最近の若者は本離れ、活字離れが著しく、分厚い世界文学を読み通す学生はごく少数だと考えている人が大半であろう。また、自分は文学作品などとは無縁だと思い込んでいる学生自身も多いだろう。

本稿でゼミの実態が理解されることにより、先生方はより多くの期待を学生たちにかけるであろうし、学生が本稿を読む機会があれば、自分たちと同じ学生がこのような活動をできるという目安、指針になるだろう。筆者は多くの学生が自分自身の力や可能性に気がついておらず、自身を過小評価しすぎる傾向があることに常々歯がゆさを感じている。そのような学生たちには、脳が飽和するほど読み、学び、議論し合い、互いに研鑽し、向上し、高め合うゼミ生の姿勢を見てほしい、と強く願う。筆者自身も「戦争と平和」ゼミの度に強い刺激を受けており、学ぶ喜びに身を震わせることも多い。

とはいえ、文学という素材を提供し、単に課題を出しただけでは、学生のポテンシャルをここまで引き出すことはできないだろうとも感じる。ではどのような仕組みがあればこのような伸びを示すことができるのか。グループディスカッションを通じて作品の本質に迫っていく楽しさだろうか。他の班を意識して、彼らより深い議論をしたいという競争心だろうか。本稿がゼミ生のモティベーションの源泉を読み取るヒントになれば、筆者として大変喜ばしいことである。

以下、**『1－2　「戦争と平和」ゼミとは何か』**で本ゼミの概要を述べた後、**『2－2　提出された課題』**や、**『3－2　本発表の例と議論された内容』**ではゼミ生たちの考察と筆者からのコメントを紹介する。

1－2 「戦争と平和」ゼミとは何か

(1)『戦争と平和』について

1805年から1820年までの15年間にわたる歴史的な時代をとらえ、貴族と農民、将軍と兵士、ロシア人とフランス人、戦場と家庭、たった今生まれたばかりの赤ん坊と瀕死の老人等等、古今を通じて世界文学の中で比類のないほど多面的に、豊富に人生を描き出している歴史的叙事詩である。本作品の紹介として、『戦争と平和』（工藤精一郎訳（新潮文庫）1972年）のカバー裏表紙に書かれている文章を以下に引用する。

第一巻

19世紀初頭､ナポレオンのロシア侵入という歴史的大事件に際して発揮されたロシア人の民族性を、貴族社会と民衆のありさまを余すことなく描きつくすことを通して謳いあげた一大叙事詩。1805年アウステルリッツの会戦でフランス軍に打ち破られ、もどってきた平和な暮らしのなかにも、きたるべき危機の予感がただようロシア社交界の雰囲気を描きだすところから物語の幕があがる。

第二巻

ロストフ伯爵家とボルコンスキイ公爵家の人々の交際。また、旺盛な実行力に富むアンドレイと、繊細な感受性で自己の内面に没頭し人生の永遠の真理を探究するピエール。二人の若い貴族に仮託してトルストイの深淵な人間観が吐露され、彼らの生活を通してロシアの実態があざやかに写し出される。

第三巻

1812年、ナポレオン軍のモスクワ侵入を描く全編中のクライマックス。国土は焼かれ生活は破壊されるが､ボロジノの会戦に示されたロシア民族のたくましい潜在力が無敵のフランス軍を打ち破る。軍の意志を無視して自分の意志に従わせたナポレオンに対比させ、民衆の意志を心の耳で聞きそれに従って勝利を得たクトゥーゾフ将軍の姿に、トルストイの理想的人間像が写し出される。

第四巻

ナポレオンの大軍は、ロシアの大地を潰走してゆく。全編を通してトルストイは、歴史を作るものは一人の英雄ではなく、幾百万の民衆の生活にほかならないという歴史観を明らかにしてゆく。また、アレクサンドル一世から一従卒まで、全登場人物559人のすべてを、個性豊かに生き生きと描き出すことによって構成される本書は、世界文学の最高峰と呼ぶにふさわしいであろう。

(2)「戦争と平和」ゼミの概要

「戦争と平和」ゼミの流れを以下に記す。このゼミは例年11月中旬頃に開催されるので、夏休み開始とともに課題が出されてから本発表までの総準備期間は3か月以上にも及ぶ。夏休み明けのゼミ生同士は「どこまで読んだ？」が挨拶代わりとなる。

①課題発表	［8月上旬］
②事前課題1提出、ゼミ生同士の論評	［9月上旬］
③事前課題2提出、ゼミ生同士の論評	［10月上旬］
④本発表準備	［10月中旬～ 11月中旬］
⑤本発表	［11月中旬］
⑥反省、感想提出	［11月下旬］

第2章　本発表まで

2－1　事前課題の提示

毎年8月上旬に、事前課題1として『戦争と平和』第一巻、第二巻を対象に以下（ア）～（ウ）の課題を出す。締切を9月上旬と設定するが、例年読み通すことができず締切延長申請をしてくるゼミ生もいる。第三巻、第四巻に対しても同様に（ア）～（ウ）の課題を出す。

（ア）作品から印象に残った箇所10箇所を各巻から抜き出し、感じたこと、考えたことを記す。

（イ）それぞれの巻ごとに一箇所を選択し、主問を設定して論じ、まとめる。なるべく普遍的な主問を考え、壮大に論じること。

（ウ）他のゼミ生の提出物に対して論評（フィードバック）をする。

2−2　提出された事前課題

(1) 事前課題1（第一巻、第二巻）

以下に提出された事前課題1を紹介する。

登場人物が多すぎる、複雑、わからない、読みにくい、といった悲鳴に近い感想が例年半分以上を占める。当時の時代背景の解説など、読むうえでのヒントは筆者から出すようにしているが、物語の壮大さについて行けないと感じる人が多い。

［ゼミ生から提出された事前課題1（第一巻、第二巻）（抜粋）］

この一巻を読んでみて思ったことは、場面の状況が掴みづらいということである。登場人物の名前が多いからということもあるだろうが、この場面は何のことだろう？と考えながら読むことがとても多かった。私自身の読み方も悪いと思うのだが、これまでの物と比べるとこれはとても頭を使うと思った。小説は好きな方ではあるのだが、これは小説だが少し苦手だと思いながら読んだ。

一切の予備知識を持たずに読み始めたので、この1冊を最後まで読み終えても何を読んでいたのか説明できる状況ではない、というのが正直な感想である。19世紀初頭、豪華そうな場面から始まり、戦争の場面に変わり、カタカナの馴染みのない名前がたくさん登場している。誰と誰がどういう関係で、この会話は誰と誰がおこなっていて…と、状況整理をしないと把握できないくらい人間が登場する。

話と話のつなぎとなるようなものがなく、いきなり場面がパッと変わるため、この本を読んでいるとまるで音とセリフのない映画を見ているかのような情報の受け取り方になる。

第三者の視点で書かれていて、登場人物ごとの心情がわかる物語をあまり読んだことがなかったが、「戦争と平和」では人によって全く異なる考え、価値、信仰を持っていることがわかった。第一巻では計算ずくめのワシーリイ公爵、妻のリーザに冷たいアンドレイ公爵、心の優しいマリヤ公爵令嬢、環境に左右されがちなニコライ、の考え方、行動、言動が印象に残った。

これらの感想は、言わば社会分析のベースライン調査（プロジェクト実施後の進捗を測るための基点となる資料やデータを把握しておく作業）に相当する。本ゼミにおいてゼミ生の成長を測定している訳ではないので、読む前のゼミ生のレベル把握は特段行っていない。提出された事前課題1には作品に取り組み始めた時点のゼミ生の視点や視野、読解力、関心事項が反映されているといえる。

以下、提出課題に対する当方からのフィードバックを抜粋して示す。ゼミ生全体へ向けたフィー

ドバックとして以下①～④に加えて、自分の文章に愛着と責任を持ちましょう、誤字脱字は極力減らしましょう、といった指摘をしている。

［提出された事前課題1に対する筆者からのフィードバック（抜粋）］

①気になった箇所は放っておかずに深掘りする

なぜ△△が□□に対してこのように思っているのかが気になった／○○がこの場面で☆☆といった振る舞いをする理由に疑問を感じた／　といった、途中で考察を止めてしまっている感想が多いのはもったいない。このような疑問は大切に。できることなら無理矢理にでも自分なりの結論を引き出すこと。

②感想

感想とは何か。

自分がほんとうに心を揺さぶられたことは何なのか、なぜなのか、正確に、できる限り偽りのない、誤りのない言葉に結晶させていくことが求められる。

この作品に揺さぶられた皆さんの感情はこんなものではないはず。作品にまだ十分入り込めていないのか、あるいは感じたありのままを出すことに躊躇しているのか、それとも言語化ができていないだけなのか。

もっと自分を見つめ、受けた衝撃を出し尽くし、書き留めてほしい。

③細部にとらわれすぎて瞬間的な印象に惑わされないように

丁寧に読むことは大切だが、あまりに微細に入り込みすぎないように。ある登場人物に着目した際に、その人物が発する一言一句にとらわれすぎている感想が多い。登場人物が発している言葉が必ずしもその人の本心であるとは限らない。文学での表現は必ずしも説明的なものばかりではない。

④美しい表現にもっと浸って楽しんで

人物描写、心情描写、自然描写の美しさについては、多くの人が指摘されているようにトルストイの筆が冴えている。文学を読む楽しみの一つに、このような表現を心ゆくまで味わうという要素もある。内容を読み取ることも大事だが、表現や描写を楽しんで！

(2) 事前課題2（第三巻、第四巻）

第三巻、第四巻についても事前課題1と同様に、作品から印象に残った箇所10箇所を各巻から抜き出し、感じたこと、考えたことを記すとともに、主問を設定して論ぜよ、という課題を出している。

最初の二巻を読み進めるまでは、本に振り回されている感じが伝わってくるが、第三巻、第四巻の感想になると、それなりに作品を楽しんでいる様子がうかがえる。多くのゼミ生はこのような分量の作品を読むことは絶対に無理、と言っていたが、周りのゼミ生が読んでいると自分も読み切ってしまうのだろう。

提出された課題を抜粋して記す。総量で事前課題1の倍近くになろうか、まずゼミ生から提出される感想の分量がとても多くなっていることに気がつく。

［ゼミ生から提出された事前課題2（第三巻、第四巻）（抜粋）］

物語も終盤に差し掛かっていることからか、最初の巻よりもスラスラと読めている自分がいると思った。戦場の場面、公爵たちの感情などがこれまでも圧倒的に多いと感じた。3巻ではナターシャを中心にしながら読み進めているつもりであったが、最終巻ではピエールの成長過程を感じながら読んだ。

この時代の「歴史」に対する考察も描かれていて、この時代のことをあまり知らない私にはやはり読み進みにくいところは多い。だけど、人間模様が変わっていく様がとても興味深い。特にナターシャやマリヤの身の変わりようなど、こんなにも人の死や経験で変わることになるのだと思うと人間味というのが出てくる。また、トルストイ自身の考え方で、ナポレオンという偉人ですらじつは「歴史の道具」にすぎず、人間という長い歴史の本の一部でしかなくて、その流れの進む先は無数の人々の意思の結果だとする見方に驚きと納得がいった。

トルストイはこの小説のエピローグでなぜ戦争は起きるのか、自由とはなにかを現実を見ながら語っている。一、二、三巻までだと戦争と社交界と結婚と幸せなどがテーマだからタイトルの『平和』というのが理解できなかったので、ここにきてなぜ『戦争と平和』というタイトルなのかが理解できた気がした。また、エピローグで「自由とは何か」について述べていて、自分を「生」あるものと意識しなければ理解できないと書いてあった。第四巻では次々に人が死に、死にゆく人も残されて生きていく人も生と死について考えている場面が多かった中で、この小説ではどう生きるか、死をどう考えるかみたいな壮大なテーマだったのではないかと感じた。

「生」の喜びが丁寧に描かれている印象。そのため、季節や自然を感じさせる文章が心に残るのではないかと思う。（第四巻に限らず）わりと死と向き合う、直面する場面が多い。公爵令嬢マリアとナターシャの関係が、いまいち掴みきれなかったように感じる。エピローグは、ハッピーエンドという解釈で間違ってはいないのか。第一巻と第二巻よりは、はるかに物語の世界に入り込んで読むことができたので楽しかった。

以下、第三、第四巻の提出課題に対する当方からのフィードバックも抜粋して示す。

［提出された事前課題2に対する筆者からのフィードバック（抜粋）］

①文学を楽しむということ

読んでいて楽しいという感想が多く見られる。「戦争と平和」ゼミを担当する者として、これ以上に嬉しいコメントはない。3，4巻の方が1，2巻よりも断然に面白かったのが第一印象である／大げさな表現をすると文学によって人生が豊かになると思う／1，2巻のときよりもスラスラと読めて、少しは話の展開を楽しみながら読めたと思う／文学を楽しむ時間がより価値のあるものとなった／といった感想に、深い喜びを感じる。

②深化する考察

第三巻、第四巻と読み進めるにつれ、もともと皆さんが持っていた力が出てきたのだろう。着眼

も考察も前回より深化している。特にトルストイの表現技法には、細かいところまでしっかりと着目している人が多い。
描写をそのまま受けとるのではなくその表現の意味するところを自分で解釈し、トルストイの意向や主張を読み取る試みを何人かの人がしていた。自らの感性だけでこのような発想にたどり着くことは素晴らしいこと。多種多様な表現に着目するだけでなく、その抜き出した箇所が暗示している領域まで踏み込んでいた人もいた。
こういった読み、解釈ができることは文学を読む上での大切な最初の一歩を踏み出せたということ。もちろん文学の世界はとてつもなく広く、奥深い。この先に広がってゆくであろう世界に圧倒されず、引き続き文学を楽しみたし。

2−3　お互いの提出課題に対する論評

芝崎ゼミの一番の強みは、仲間同士の対等で互恵的な関係の中で互いに貢献し学び合うこと、すなわちピアラーニングだと捉えている筆者は、学生同士が「お互いの提出物に対して論評」しあうことは大変有用であると考えている。ゼミ生には、論評の意義は以下（ア）〜（ウ）であると予め伝えている。

（ア）ゼミ生が多様な読み方、解釈の仕方に触れる

自分で作品を読み、感想を記し主問設定をして論じる。これだけでは自分の読み方しかできていないままグループワークに突入することになる。作品の無限の広がりとともに、他のゼミ生からはどの箇所に対してどのような指摘がなされたのか､多種多様な解釈がありうることを知ってほしい。自分が感じていた疑問の解消の一助になりうるコメントも見つかるだろうし、あるいは新たな疑問発見にもつながるだろう。

（イ）よいものは全て取り込み自分のものとする

何事に限らず、まずはよい事例を模倣することから「学び」は始まる。考えそのものをなぞるのではなく、着眼点やまとめ方、論理展開といったやり方を他のゼミ生の提出課題から学ぶ。仲間が渾身の力で執筆した感想や主問をもとに皆で切磋琢磨してほしい。

（ウ）論評すること自体

他のゼミ生の感想に対して論評をすること自体が目的である。口頭ではなく、文面で他者への論評を行う機会はそれほどないので、多くを学ぶことと思う。コメントすることの面白さと難しさを感じてもらうとともに、同じ『戦争と平和』という対象に対して他のゼミ生からはどの箇所にどのような指摘がなされたのか、を知り、それも自分の学びや気付きにつなげてほしい。

あるゼミ生がゼミ終了後に提出した感想にピアラーニングについて言及していたので、以下に抜粋する。

全体を通しては、他班の発表や質疑も自分の成長につなげることができること、自分たちはスライドを作って発表をするところだけではなく質疑応答の時にも自分たちの発表を成長させることができるということを学んだ。他班の発表で気づいた課題や良いところは自分たちにも取り入れたり見直したりすることで自分たちの発表に磨きをかけることができると思う。また質疑のと

きに得た新しい視点からの疑問や指摘を全員で考えることによって、議論の奥行きが広がるように感じた。このように全体から学びを得られることが自分の視野が広がったように感じた。

このゼミ生は「お互いの提出物に対して論評」によるピアラーニングの枠を超え、ゼミ活動全体を通して互いに学び合う手応えをつかんでいる。芝崎ゼミの重要な特質である「ゼミ生同士の対等で互恵的な関係の中での学びあい」に気がつくと、ピアラーニングを意識してゼミの場を活用して更なる学びにつなげていくことができる。もちろんピアラーニングは自身が納得感を伴う必要がある。先生から生徒へ、という上意下達的な一方的な関係の中でしか学びを経験してこなかった学生にとっては、「同世代の仲間からも学べる」という感覚が腑に落ちることが最初の難関であろう。

2－4　発表準備

『各班で発表のテーマを決めて『戦争と平和』を論じる。それぞれの班で自由に論じてください。』

ゼミ本番の発表内容に対する指定はこれだけである。「論じる」が意味するものは、これまでのゼミ活動を通じて十分理解しているので、論じ方は各ゼミ生に任せている。

ゼミ生は本発表に向けてひたすら準備をする。他のゼミ課題と同時並行して準備せざるを得ないので、いつも時間に追われている。時間調整に難航してメンバーがなかなか集まることができない、という毎年繰り返される悩みも本発表が近づくと何とか工夫して乗り越える。授業と授業の合間やバイト前のわずかな時間のやりくり、帰宅後のラインやスカイプのやりとりを重ねて、発表内容を詰めていく。

ゼミ生の作品に対する理解が進み、含蓄に富んだ発表ができあがるまでのプロセスにおいて、芝崎ゼミが内包している「心理的安全性」が大きな役割を果たしていると筆者は考えているので、ここで同概念について説明しておきたい。「心理的安全性」とは、「psychological safety」を和訳した心理学用語で、チームのメンバー一人ひとりが不安を感じることなく、安心して発言や行動ができる状態のことを指す。より身近な表現として、「チームの中で自分が自分らしく活動している状態」や「安心して何でも言い合えるチームだと感じる状態」と言い換えることもできる。アメリカGoogle社の調査チームが「効果的なチームを可能とする条件は何か」を見つける目的で2012年に行った「Project Aristotle」というプロジェクトの研究結果として、「心理的安全性」が生産性の高いチームづくりに最も重要であることを発表して以来、同概念が注目されるようになった。チーム内での「心理的安全性」が高ければ高いほど、建設的な議論が可能になると考えられている。

芝崎ゼミでは不安を感じることなく、誰もが自由に発言できる状態を指す「心理的安全性」が担保されている。それにより、メンバーは余計なストレスを感じずにグループワークに勤しむことができるため、自分の能力を最大限に発揮することができ、結果的にこの後に紹介するような発表を構築することにつながったと筆者は考える。

第3章　本発表

3－1　本発表の形式、内容、流れ

本発表当日の流れは、各班の発表、質疑応答、講師陣からのコメントという3つのステージから

構成され、それぞれ15分前後、30分～ 1時間前後、5分前後の時間を要する。「戦争と平和」ゼミは3年生を対象としているが、4年生もほぼ毎年数名参加する。就職活動や卒論執筆に忙しい中、文献を再読し、自分たちの論点を再度構築して自主的にゼミに参加する4年生の班は、敬意を表して「長老班」と呼ばれる。1年間多く学んでいる長老班の切り口はさすがに鋭いものが多く、更にゼミ生の学びを深いものにしてくれる。

3－2　本発表の例と議論された内容

抜粋とせざるを得ないが、発表スライドを数例掲載するとともに、どのような議論がなされたか、代表的なものをいくつか紹介したい。発表のキーとなるスライドを抽出した。実際には一班当たり20枚前後のスライドが作成される。

これまで多くの発表がなされてきた。例えば、一人の登場人物に焦点を絞り、その人物の成長過程を時系列に追い、重要なターニングポイントにおいてその人物が何を考えどのように行動したかを分析するというやり方がある。他には最初の紹介事例にあるように、ある重要なキーワードを選び、そのキーワードがどのような意味を持ち、受けとめられ、達成されたかを主要な登場人物に当てはめて考察する、といった発表もある。もちろんトルストイの経歴や思想が、作品が執筆された時代背景と合わせて論じられることも多い。

(1)「神の愛」をテーマに

ある班は、登場人物がそれぞれどのような愛を育んだか、人物毎の分析を行った。トルストイがこの作品で伝えたかったテーマは「神の愛」ではないかという仮説を立て、この「神の愛」の領域に辿り着いたのはアンドレイとピエールであるという考察を繰り広げた。

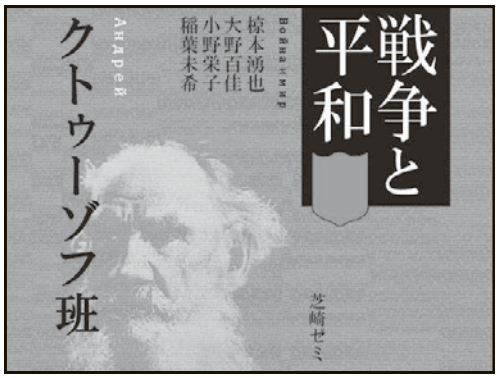
アンドレイは1812年のボロジノの戦いで致命傷を負い、身体的活動能力をほぼ完全に奪われると、それまで決闘を挑むために追いかけて来たアナトールをも許せる心境に達する。アンドレイは活動能力を奪われる度に、そしてその度合いが深刻であればあるほど、身内、他者、敵という具合に愛の対象を拡大してゆき、ついには「神の愛」を知り、死をも超越する。

ピエールはプラトン・カラターエフという農民出身の兵隊との出会いを通して、自分の内面成長を促進する。ピエールはカラターエフの中に「ロシア的な良心の具象化」を見いだす。カラターエフは「あらゆるロシア的な、善良な、丸っこいものの化身」として永久にピエールの心にとどまり、すべてを愛すること、すなわち「神の愛」をピエールに伝える。

このような「神の愛」の考察のあとに、この班は「それでは自分たちはどう生きてゆくか」というテーマを取りあげ、「例え葛藤の多い人生だとしても、より善く生きようという意志を持ち、人に愛を与え続ける」として自分たち自身の決意表明を行った。

ロマン・ロランは『トルストイの生涯』（1928年）の中で、「祖国の危難と敗残と、臨終の苦悩とを通じて、この小説の二人の中心人物であるピエールとアンドレイとは、愛と信仰によって、精神の救済と神秘的な歓喜とに到達する。その愛と信仰とは生きた神を顕現する。」と述べている。この発表をした班が、自分たちで考察を積み重ねて独力でロランと同じ想いに辿り着いたことに対して、筆者は大きな喜びとゼミ生への果てしない可能性を感じた。

テーマ：『神の愛』



もくじ

- 班の問い
- 主要人物ハイライト
- 結ばれなかった愛と、主要人物たちが最終的に行き着いた愛
- 「神の愛」—やくわり1：他人の「神の愛」の素質を磨く
  やくわり2：未知を恐れなくさせる
- 自分たちはどう生きていくか

アンドレイ

- 戦場で死にかける
- リーザの死
- ピエールとの語らい
- ナターシャとの出会い
- ナターシャの裏切り
- 二度目の死にかけ
- アナトーリとの再会
- ナターシャとの再会
- 死

アンドレイ２：アナトーリとの再会

「あわれみ、兄弟たちや愛する者たちに対する愛、われわれを憎む者に対する愛、敵に対する愛—そうだ、これは地上に神が説いた愛だ。」(3.481)

「たえず、万人を愛し、常に愛のために自分を犠牲にすることは、結局はだれをも愛さぬことであり、この地上の生活を生きぬことであった。」(4.114)

「一人の女性に対する愛がいつともなく彼の心にしのびこみ、そしてまた彼を制に結びつけるのである。」(4.115)

神の愛＝隣人も敵をも愛する
⇒死を超越する

地上の愛＝親しい人への愛
⇒生に結びつける

神の愛と地上の愛を知り、生から目覚め死んでいく

ピエール

- 父の死、財産を得る
- エレンとの結婚
- ドーロホフとの決闘
- フリメーソンの思想に惹かれる
- ナターシャへの恋
- 軍隊へ
- カラターエフとの出会い
- ナターシャとの再会、結婚
- 善の実践

ピエール２：カラターエフとの出会い

ピエール：
「ピエールが見たかぎりでは、執着とか、友情とか、愛とかいったものは、カラターエフはいっさいもっていなかった。だが、彼は運命が引き合わせてくれたいっさいのものを愛していたし、特に人間-といってもある特定の人ではなく、目の前にいるすべての人々とだが-仲良くしていた。」(4.93)

ピエールの変化：
「世界の美しい秩序に対する信念も、人間の魂、自分の心に対する信仰も、消え失せてしまったのである。」(4.81)

⇓

「心の中に、先ほど崩壊した世界が、いまは新しい美しさにつつまれて、これまでとはちがうゆるぎない基礎の上に建てられてゆくのを感じていた。」(4.89)

カラターエフに会ってすべてを愛する思想を知る

テーマ：『神の愛』

結ばれなかった愛

ピエール×エレン　美しさ、肉欲、虚栄⇒憎しみ、虚しさ、疑い

アンドレイ×リーザ　外見の美しさ、社交界での名誉⇒束縛

ナターシャ×ボリス　恋に恋する⇒不安

ナターシャ×アナトーリ　穴を埋める、色仕掛け⇒だまされた～

ロストフ×ソーニャ　家族の延長⇒ままごと、希薄化

マリヤ×アナトーリ　美しさ、憧れ⇒あきらめ

＝表面的、自分のため

主要人物たちが物語の中で行き着いた愛

アンドレイ　憎んでいた相手にゆるしを与え、愛そうとした

ピエール　すべての人を愛すという善の実践を行った

ナターシャ　敵にゆるしを与え、愛そうとし、人を助けるようになった

マリヤ　憎しみや嫉妬を抱きながらも、すべての人への愛を追い求めた

ロストフ　農民のため、家族のためにはたらいた

＝与える愛、他人のため

与える愛

親しい人への愛

⇒だれでもできる

敵への愛（すべての人への愛）

⇒むずかしいが、登場人物たちは実践しようとした

トルストイはすべての人への愛を「神の愛」＝「人生の真理」と表現し、登場人物たちもその愛の実践へと向かっていった。

自分たちはどう生きてゆくか

『戦争と平和』を読んで、わたしたちは「神の愛」に触れた。

「諸民族の運動を生み出すのは、すべての人々の活動である」（旧4.494）

主要キャラクターをはじめとする登場人物たちは、そうした活動の中で苦しみ憎しみを抱きつつも、隣人を、そして敵をも愛そうと努力する。

「人が人にいかに接するか」ということの集積が、戦争をも平和をも生むということ。

わたしたちは・・・
たとえ葛藤の多い人生だとしても、より善く生きようという意志を持ち、人に愛を与えつづけます。

第三巻第二部第三十七章480頁（アンドレイ　「神の愛」）

彼は、ようやく、泣きはらした目にいっぱい涙をためて、ぼんやりこちらを見ているこの男（アナトール）と、自分とのあいだにあったあの関係を思い出した。アンドレイ公爵はすべてを思い出した、するとこの男に対する胸底からつき上げてくるようなあわれみと愛が、彼の幸福な心をみたした。

アンドレイ公爵はもうこらえきれなくなって、人々に、自分に、そして人々と自分の迷いに、やさしい愛の涙を注ぎながら、しずかに泣き出した。

『あわれみ、兄弟たちや愛する者たちに対する愛、われわれを憎む者に対する愛、敵に対する愛――そうだ、これは地上に神が説いた愛だ。妹のマリヤに教えられたが、理解できなかったあの愛だ。これがわからなかったから、おれは生命が惜しかったのだ。これこそ、おれが生きていられたら、まだおれの中に残されていたはずなのだが、いまはもうおそい。おれにはそれがわかっている！』

『戦争と平和』のクライマックスの一つであるこの場面は、キリスト教的な「神の愛」――汝の敵を愛せ――を直接的に言語で示すことに、これまで人類が成し遂げてきたありとあらゆる試みの中でもっとも成功した描写といえるのではないか、とすら思えるほど印象的である。アナトールの

悪役ぶり、下劣ぶりは500人を超える登場人物の中でも特に際立っているが、この場面でのアンドレイの心情を描かんがためにトルストイが渾身の力を込めてアナトールという卑劣漢を創作したのだとも考えられる。

プラトン・カラターエフの示す「神の愛」は、ピエールによって示される。ピエールはカラターエフを無気力な諦観の人としてではなく、この上もなく困難な状態にありながら、なお根強く生命力を示している人、生活に対する愛着を持っている人と受けとめた。そしてカラターエフの死後も長い間、カラターエフをもっとも尊敬すべき人間として記憶にとどめていた。カラターエフが好んで何度も繰り返し語った爺さまの話にも「神の愛」は体現されている。

第四巻第三部第十三章238頁（カラターエフ　「神の愛」）

たまたまその囚人たちの中に、商人を殺した、つまり、真犯人だった男がまじっていた。その男はきいた、爺さん、そりゃどこでだね？　いつ、何月ごろのことだね？　いろいろとくわしくたずねた。その男の心はうずきだした。爺さまの前ににじり寄ると――いきなり、がばとひれ伏した。爺さん、おめえさまはおれの身代わりになって破滅したんだ。神さまは見てなさる、罪もねえのに、この爺さんは苦しんでなさるのだ。その商人を殺したのは、このおれなんだ、そしてナイフを眠っているおめえさまの枕の下にかくしたんだ。爺さん、許してくれ、キリストさまのためにこのおれを許してくれ（略）

おれは人を六人も殺したが、この爺さんほどかわいそうに思った者はいねえ。おれのためにこれ以上泣かねえようにしてあげてくだせえまし。そこですっかり白状した。しきたりどおりに、書類がつくられて、送られた。（略）

ところが、爺さまはもう神さまに許されていたんだ――死んでたんだよ。

(2) 自然描写をテーマに

『戦争と平和』の自然描写には、登場人物の行動や言葉だけでは語りきれない「何か」が託されていると感じた班があった。この班は主要な登場人物が何らかの人生の転機の際に必ずといってよいほど空を見上げ、物思いにふけることに気がつき、自然描写の中でも特に空の描写に着目した。そして、この作品における自然描写、特に空にまつわる表現は何を表しているのか、という主問を設定した。ニコライが凄惨な戦場から目を逸らして見上げた「ドナウの空」、アンドレイが会戦で重傷を負い、地面に倒れた際に目にした「アウステルリッツの空」、ピエールが誘拐未遂事件直後のナターシャに思わず自分の本心を告白して帰宅する夜空に見た「ポンス・プルックス彗星の夜空」、このような場面を手がかりに、登場人物が生や死など人生の大きな出来事に向き合うときに空の描写がでてくるのではないかとの仮説を立てた。そして登場人物に意識の変化が生じ、彼らが今まで抱えていた名誉やプライドなどを小さなものと感じ、当たり前の日常の中に「幸福」があることに気がつき、愛や幸福や希望を追求しはじめることを発表の中で指摘した。

第一巻第二部第八章286頁（ニコライ　「ドナウの空」）

ニコライ・ロストフは顔をそむけて、まるで何かをさがしもとめるように、遠くを、ドナウ河の流れを、空を、太陽をながめはじめた。空のなんと美しく見えたことか、なんと淡青く澄ん

テーマ：『自然描写』

目次

（0） 自然描写に着目した理由
（1） 目標規定文
（2） 着目する自然描写
（3） 自然描写の関連性
（4） 自然描写から分析する「戦争と平和」
（5） 参考文献

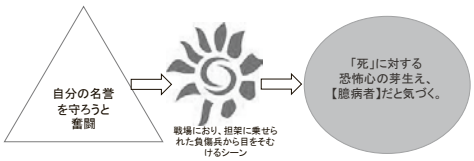
（2）着目する自然描写

「戦争と平和」の中には数多くの自然描写が存在する
例；比喩表現（隠喩、直喩）、時の流れを表す表現など

→登場することが多かった、空にまつわる表現に着目
→太陽、空、星の3つに絞る

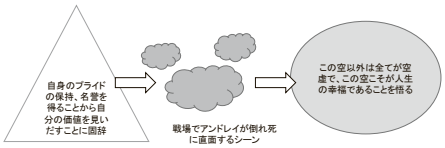
太陽が出てくるとき

例；戦場でのロストフ×太陽



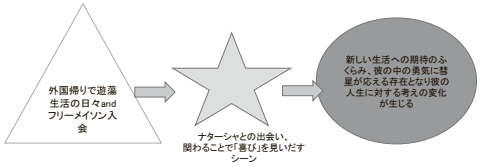
空が出てくるとき

例；アウステルリッツ会戦時のアンドレイ×空



星が出てくるとき

例；ピエール×彗星



（4） 自然描写から分析する「戦争と平和」

＜戦争＞

◎太陽が見え隠れ
　→戦争のはじまり
　社交界での明暗

◎空の存在
　→生死を意識するときに関係
　当たり前の幸福

空は＜戦争＞でも＜平和＞でも扱われている、架け橋の存在

＜平和＞

◎多数存在する星、突如現れる彗星
→戦争の終わり
　希望、愛、幸福を感じる人間

BUT　感じて終わりではなく、ここからさらなるステップアップを目指す！

（4）自然描写から分析する「戦争と平和」

人物の行動や態度で淡々と進むストーリー展開ではなく、
自然描写における「戦争と平和」は…

☞名誉やプライドのために戦争を行う兵士が、戦時中に空を見ることで身近にある名誉やプライド以外の幸福に気付き、愛や幸福や希望を追求し始めることを描いている

自然描写を用いることによって、解釈を読者に委ね、幸福のあり方、生きる上での喜びを探させた

で、しずかで、そして深い空だろう！　沈みゆく太陽のなんと赤く、そして荘厳なことだろう！（中略）
あちらには静寂と、幸福があった……『何も、何もぼくは望まないだろう、何も、ただあそこへ行かれさえしたら』とロストフは思った。（中略）
『神よ！　この大空におわす主よ、ぼくを救いたまえ、許したまえ、守りたまえ！』とロストフは口の中でささやいた。

第一巻第三部第十六章534頁（アンドレイ　「アウステルリッツの空」）

『なんというしずけさだろう、なんという平和だろう、なんという荘厳さだろう、おれが走っていたときとは、なんという相違だろう』とアンドレイ公爵は考えた。（中略）
どうしておれはこれまでこの高い大空に気がつかなかったのか？　やっとこの大空に気がついて、おれはなんという幸福だろう。そうだ！　この無限の大空のほかは、すべてが空虚だ。すべてが欺瞞だ。この大空以外は、なにもない、何ひとつ存在しないのだ。だが、それすらも存在しない、しずけさと平和以外は、何もない。おお、神よ、栄えあれ！……

これらの場面はいずれも空との対比によって、戦争の大義や権威が相対化、格下げされているという共通点を持つ。トルストイの風景は、ほとんどの場合に作中人物の視点から、その者の知覚や認識をとおして提示されていることが以前から指摘されてきた。二人の立場から語られる空は、どちらもよくこの特徴を示している。一方で相違も指摘できる。

空に対するアンドレイとニコライの意識の違いは興味深い。ニコライは地上の凄惨な戦争とは対照的な積極的な意義を、ドナウの空に見いだしている。それはニコライ自身と照応し、彼を受け入れてくれるであろう自然である。ニコライはまた空に神の在ることを疑わず、これに祈りを捧げている。

ニコライの考えに対して、アンドレイは空が人間を乗り越えた偉大なものであり、諸々の価値を超越していることに安らぎを覚えている。無限の空が人為的な一切から遮絶されて、ただ在りつづけていることこそが、アンドレイにとっての「静寂と平安」である。ところが、彼は永遠で無限なものと有限なものとを矛盾するものとして切り離してしまい、有限な人間生活の中に無限の自然をとりこまなければならないという考えに到達しない。彼は有限な人間とその生活を、卑小で無意味なものと結論してしまう。

ベズーホフ伯爵家の庶子で、人生の意味を求めて大きく振幅しつづけるピエールもまた、忘れがたい空を目にしている。1812年初頭のモスクワで、アンドレイの婚約者だったナターシャに思わず自分の本心を伝えたあと、ピエールは帰宅する途中で凍てつく夜空にポンス・ブルックス彗星を見上げる。

第二巻第五部第二十二章721頁（ピエール　「凍てつく夜空と彗星」）

ピエールは、空ばかり見上げていたので、自分の心を領している高揚に比べて、あらゆる地上のものの腹だたしい低劣さを感じなかった。（中略）あらゆる恐怖と世の終りを予告すると噂

されていたあの彗星だった。しかしきらきら光る尾を長くひいたこの明るい星も、ピエールの胸にすこしの恐怖感も呼びおこさなかった。それどころか、ピエールは涙にうるんだ目で、喜びに胸をふるわせながら、この明るい星を見上げていた。（中略）ピエールには、この星が、新しい生活に向かって花を開き、やわらげられて、勇気をとりもどした彼の心の中にあるものに、完全に応えてくれているように思われたのだった。

後に彼の妻となる運命の女性に出会い、生き生きと甦ったピエールの心は、不吉の前兆といわれる巨大な彗星にさえ擬人化した想像を投影し､そのような星と自分とのあいだの照応を感じている。

この作品は人の理解や認識の達しえない領域、人知を超越する何ものかを示唆する記述に満ちており､「アウステルリッツの空」を初めとする自然描写はその表現である。他にもペーチャが戦死する前の夜に見上げた空（第四巻第三部第十一章)、フランス軍の捕虜になったピエールが見上げる夜空（第四巻第二部第十四章）など作品には空の描写が繰り返し現れ、トルストイの自然観が反映している。戦争も平和も所詮は人間の営みであり、雄大な自然を描くことで余計にその人間行為が小さなものとして浮き立たせられる。

(3) 作家トルストイをテーマに

トルストイの日記や関連書籍を読み、作者の生い立ちがどのように『戦争と平和』に関連しているか、分析しようとした班もあった。この班は、単に「トルストイは○○年に結婚した」という時系列の事実把握だけではなく、その出来事がトルストイに何をもたらしたのか､『戦争と平和』にどのように反映されているのかについて解明を試みた。

レフ・トルストイは1828年、ヤースナヤ・ポリャーナという土地に広大な荘園を所有するトルストイ伯爵家の四男として生まれる。父の名はニコライ、母はマリアで作中の人物と一致している。

トルストイは外交官になりたいという希望をもってカザン大学の東洋学部に入るが、学業は芳しくなかった。授業は欠席、試験は落第点が続き、結局1847年に大学を退学する。一方でギャンブルに熱中して多額の借金を作る始末であった。作中にもニコライがドーロホフから賭博で多額の金を巻き上げられており、様々な人生経験を文学に活かしていることがうかがえる。

大学退学後はヤースナヤ・ポリャーナの領地に戻り、自らの勉学と農地経営の仕事にあたることを決意する。作中にもピエールやアンドレイ、ニコライがそれぞれの領地経営を営む場面がある。

その後1854年に軍隊に入り、戦火の中で文学活動をはじめる。戦場で死と直面しながら『幼年時代』『少年時代』などを書く。1862年に18歳のソフィヤに結婚を申し込み､その一週間後に結婚した。それから18年間、二人はヤースナヤ・ポリャーナからほとんど離れることはなかった。結婚はトルストイに幸せをもたらし､『戦争と平和』の随所に家庭生活の暖かさを感じることができる。

思想面では「自然は人間を善良、自由、幸福なものとしてつくったが、社会が人間を堕落させ、奴隷とし、悲惨にした。それゆえ自然に帰らなければならない。人間の内的自然を回復しなければならない」とするジャン＝ジャック・ルソーの自然主義の影響を受けた。

トルストイの生涯は多くの論文や文献で明らかにされている。ここでは「NHKテレビテキスト

100分de名著「戦争と平和」2013年6月　川端香男里」を主に参考にして、ゼミ生の発表に対して補足説明をする。

若い頃のトルストイは、振幅の多い生活にあけくれている。多くの挫折を繰り返し自由奔放さの反面厳しい自己反省を繰り返す。

トルストイは幼い頃に両親を失い、両親の遺産も分割されないまま、親族の後見のもとにおかれていた。1847年、兄妹が成長したので、はじめて正式に遺産分割の話がはじまったのだが、まさにその時にトルストイは大学中退を決意してヤースナヤ・ポリャーナに帰っている。そして同年6月に兄妹は遺産分割の書類に署名し、トルストイはヤースナヤ・ポリャーナの領地約1500ヘクタールと農奴330人の所有者となり、現在の日本の貨幣価値に換算すれば億をもって数える莫大な収入を得ることになる。

模範的な地主をめざして大勢の農奴を抱える領地経営を試み、農民のための教育に専念するが、いずれも失敗する。トルストイには農場を経営するための農業の知識もマネージメントの経験も全くなく、何をすればよいのかわからない。厳しかったのは、農奴制が数世紀続いている間に地主と農民の間に人間不信の壁ができていたことである。トルストイは甘い善意の無力さを思い知り、迷走し続ける。

トルストイは農奴解放以降の社会改革の中で、教育を重要な要素であると認識しており、農民のための学校開設の仕事に勤しんだ時期もあった。農民のためのトルストイ学校が開かれ、通学希望者がどんどん増えて分校も20を数えるようになった。人間の可能性を開花させるというトルストイが思い描く理想の教育が実現されようとしていた。

しかしトルストイが不在中に憲兵隊と地方警察が踏み込んで家宅捜索を行う。秘密の印刷機械があって革命文書を作っているという密告に基づいて行われた捜索だったが、捜索というよりは徹底的な破壊だった。警察は革命活動の証拠などは発見できなかったが、警察の介入によってヤースナヤ･ポリャーナの雰囲気は一変してしまった。農民たちのトルストイを見る目つきがすっかり変わってしまったのである。結局警察は国策に沿わない自由教育を壊滅させることには成功した。

領地経営や教育事業がうまく展開せず、深刻な行き詰まりを経験する中、トルストイは1854年にクリミア半島のセワストーポリに赴き、戦闘に参加しながらセワストーポリのルボルタージュ三部作を発表し、一躍文壇の寵児となる。この時期トルストイは文学を自分の天職であるとみなし、「私の天職は文学だ――書くこと、書くことだ！」と日記に書き付けている。

父と母を幼くして失ったトルストイにとって結婚や満ち足りた永続を保障してくれる家庭は一つの理想郷であった。1862年から始まったソフィア夫人との結婚生活はトルストイにとってまさにそのような理想郷だったといえよう。臆面もないほどの幸せの感覚。幸福な家庭生活が、創造力豊かに描き出されることとなった。『戦争と平和』はいくつもの多様な要素から成り立っているが、この作品を読む者が一様に感ずる魅力は、幸福な家庭生活の讃歌というものであろう。

3－3　発表後の反省・感想

発表後、1週間以内に参加者全員から「戦争と平和」ゼミの感想が届く。読み始めてすぐに提出された第一、第二巻の感想と比べると、飛躍的な成長を遂げたと言ってもいいような考察に富んだ

ものや、達成感、解放感に満ち溢れたものが毎年多く見られる。

以下、何点か抜粋して紹介する。

［ゼミ生から提出された「戦争と平和」ゼミの感想（抜粋）］

一つの文を見るにも多様な解釈が見られ、正しい答えがないからこそ無限の可能性がある。お互い読んできた作品を基にトルストイに迫っていく、作品を分析する楽しさを今回知ることができ、個人的にはとてもよかったと感じる。

そしてなにより読む楽しさを感じていたからこそ一巻から二巻そして三巻、四巻と読み進めることができたのだと思う。本を読んでいてここまで一人一人の登場人物が自分の中で生きた存在として浮かびあがってきたのは初めてだった。性格や考え方こそ違えど、それぞれの登場人物に感情移入しながら一喜一憂しながら夢中になって読み、そして仲間とそれを共有できた、この経験は宝物にしたいと思う。

読むことで1～4巻を通じた彼女の心の動きが一本の線で繋がっているということが分かり、アンドレイが亡くなった後の彼女が一人、生の向こう側を考えている場面を読んだ時のあの感動は忘れられない。

『戦争と平和』を読んで、改めて自分を考えるきっかけにもなったと私は思う。私は初めて、自分ってどうやって生きているのだろうと考えた。そして、私も名誉とか栄光とか求めて生きているなと考えたり、全体の中の一人でちっぽけだなと思ったりと自分のこともいろいろ考えたりした。『戦争と平和』に出会えてよかったと思う。もう一度、ゆっくりじっくり読み直したいなと思った。

グループワークでは、有意義な時間を過ごすことができたと思う。生命の中に神が宿っていて、その生命を愛により結び付けていく。生命は肉体的な死が訪れても生きて、生命が愛により繋がり続けるという自分たちの主張により、私自身が救われることもあった。

100年以上前に書かれた本だけれど、今のわたしたちと似たようなことで悩み、悲しみ、喜んでいる姿に共感することが何度もあった。また、ただ共感するだけでなく、歴史、民衆、英雄論を学ぶなど、たくさんのことを得た本だった。それに、『ジャン・クリストフ』以来、1年ぶりに超大作を読むことの喜びに再び出会うことができた。これからも様々な物語の世界に入り込み、昔の作品だからといって敬遠することなく、どんどんチャレンジしていきたいと強く思っている。まずはトルストイの『復活』を読み切りたいと思う。

第4章　終わりに

4－1 「戦争と平和」ゼミの意義

ある文学作品を読み、それについて論じる。このような課題が出されたとき、真っ先に考えつくことは、その作品に対する先行研究の調査であろう。

ロマン・ロランによる『トルストイの生涯』（1928年）は、『戦争と平和』の最も大きな魅力はその若々しい心にあるとして、トルストイは生命そのものをとらえておりそれが非常にしなやかで、流動的で、あたかも一行一行に生命が鼓動を打っているように思われるとした。ロシア人として初めてノーベル文学賞を受賞した作家イワン・ブーニンは、その著書『トルストイの解脱』（1937年）でトルストイが一貫して追及した死のテーマについて触れ、トルストイの思想は「自分はいかに生きるべきか」という個人的な問題への解答であるとした。古代ギリシャの詩人アルキロコスの詩「キツネはたくさんのことを知っている。ハリネズミは大きなことを一つだけ知っている。」に触れ、作家をハリネズミ型とキツネ型に分類したアイザイア･バーリンの著した『ハリネズミと狐――『戦争と平和』の歴史哲学』（1953年）は、今なおトルストイ研究者にとって必読の書である。もちろん対話主義とポリフォニーを提唱したミハイル・バフチンを外すことはできない。『ドストエフスキーの詩学』（1929年）はそのタイトルからもわかるように必ずしもトルストイを主題として論じたものではないが、トルストイの小説においては、しばしば作者の考えに登場人物が近づくことが真理への到達と同視されるとし、これをモノローグな構成であるとして批判した。

日本の研究者も特筆すべき成果を上げている。『人類の知的遺産52　トルストイ』（1982年）において、日本トルストイ協会会長の川端香男里は『戦争と平和』で描かれている集団意識、群集心理に着眼し、「歴史の原動力は個人ではなく、大衆の無自覚な集団精神にある」とトルストイの歴史観を引き出す。同様の指摘は八島雅彦からもなされており、「トルストイの目には、歴史を動かす真の原動力は歴史や社会全体のことを考えてなされた行為ではなく、むしろ、そうした大局的な見地からなされた行動とは正反対のところにある、名もない人々のその日その日の目先のことしか考えていない行動のほうであるように見えた」と『トルストイ』（1998年）で述べている。人は意図的に歴史に参加することはできず、すなわち人は自分の意識的な行為の本当の意味を知りえないというトルストイの歴史観は、多くのトルストイ研究者の共通認識である。

トルストイの三大長編『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、『復活』をはじめ、数多くの作品を翻訳している藤沼貴は『トルストイと生きる』（2013年）の中で、トルストイの作品の読みの深さでは専門研究家を超えていたとされる本多秋五の論文、『戦争と平和』の題名は実は『戦争と平和』ではないとするトルストイ研究家ザイデンシヌール女史の主張など、多くの先行研究を紹介している。その他にも、ほとんど一生を通じて続けられたトルストイの教育活動の紹介、本作品のテーマともいえる「生命力の肯定」や「人生への愛」に関する考察、アンドレイを通じての合理主義と個人主義の限界、人間という限界に縛られている知性とロシア的な精神の象徴など、藤沼貴の研究範囲は大変多岐に及ぶ。

このような先行研究を網羅し何がどこまで議論し尽くされているか、ゼミ生に調べさせることは

全く課していない。また、トルストイの他の著作を含む他の文学作品との比較も求めていない。トルストイの先行研究は一つ一つが重厚な内容が多く、論文を読むうえでの前提とされている文献や知識も広い。先行研究に振り回されて2、3の引用をして、それをつなぎ合わせる作業に終わってしまうくらいなら、『戦争と平和』だけに注力した方がよいと考え、先行研究や解説本を読むことは全く推奨しなかった。

何故に文学を読むか。折に触れ、ゼミ生に自分の考えを伝えてきた。先人の英知に触れるためと伝えたこともある。時間も空間も飛び越えて、人類共通の財産にアクセスしよう、というメッセージを伝えたこともあった。一方でこのようなメッセージを発しながら、自分の本心とは何かが違うのではないか、自分が本当に表明したいこととは完全に一致していないのではないか、という違和感も感じていた。直近のゼミでは、お腹が空いたり喉が渇いたりしたときに食物や飲料を欲するのと同様、魂も「知」を欲している。人間は本能的に「知」を求めている生物なのだ、だから人は読むのだ、と伝えた。

文芸評論家の小林秀雄が『トルストイを読み給え』の中で『戦争と平和』を読む理由を述べており、ゼミ生に共有することも多い。以下に同文章を引用する。

> *若い人々から、何を読んだらいいかと訊ねられると、僕はいつもトルストイを読み給えと答える。すると必ずその他には何を読んだらいいかと言われる。他に何も読む必要はない、だまされたと思って「戦争と平和」を読み給えと僕は答える。だがかつて僕の忠告を実行してくれた人がない。実に悲しむべきことである。あんまり本が多過ぎる、だからこそトルストイを、トルストイだけを読み給え。文学において、これだけは心得て置くべし、というようなことはない、文学入門書というようなものを信じてはいけない。途方もなく偉い一人の人間の体験の全体性、恒常性というものにまず触れて十分に驚くことだけが大事である。*

今回、本稿を執筆するに当たり、ゼミ生が発表準備やゼミ当日の議論を通じて学んだ点、気がついた点を列挙してみると、極めて多種多様なことをゼミ生が学びとっていることに改めて驚かされる。「戦争と平和」ゼミの直後に成長が見られなくても、何らかの知的刺激の種がしっかりと植え付けられ、数か月数年経過したあとに花開くゼミ生もいるようである。2011年度から順次実施されている新学習指導要領のもと、教育現場では論理的な文章や、報告書、企画書、法令文など実用的な文章を教材として扱う機会が増え、文学作品を扱う機会が減少の一途を辿っていると聞く。やり方次第では、文学を題材にすることでこれだけの学びが得られることを、この身をもって知っている筆者としては、そのような動きなどは無関係に学生たちには読み、学び、議論してほしいと強く願わずにはいられない。

本稿を読まれている諸先生方におかれても、学生の秘めたるエネルギーを信じていただき、彼らが大きな課題にじっくりと取り組む様子を温かく見守り続けていただきたい。

参 考 文 献

H. ギフォード『トルストイ』（教文館）1982年
レフ・トルストイ（工藤精一郎訳）『戦争と平和』（新潮文庫）1972年
レフ・トルストイ（藤沼貴訳）『戦争と平和』（岩波文庫）2006年
アイザイア・バーリン『ハリネズミと狐――『戦争と平和』の歴史哲学』（岩波文庫）1953年
イワン・ブーニン『トルストイの解脱』（冨山房）1937年
ロマン・ロラン『トルストイの生涯』（岩波文庫）1928年

川端香男里『人類の知的遺産52　トルストイ』（講談社）1982年
川端香男里『戦争と平和　トルストイ』（NHKテレビテキスト）2013年
小林秀雄『小林秀雄全作品19』（新潮社）1979年
藤沼貴『トルストイと生きる』（春風社）2013年
中村唯史『トルストイ『戦争と平和』における「崇高」の問題』（山形大学人文学部研究年報第8号）2011年

Charles Duhigg（2016）. What Google Learned From Its Quest to Build the Perfect Team, *The New York Times Magazine*